

令和7年度「一般選抜後期日程試験（個別学力検査・小論文）」講評

後期小論文課題における出題の意図

本学では「英語のコミュニケーション能力のさらなる向上とともに、異文化に対する理解力や対応力の習得に意欲を持つ人」および「地域社会のみならず、広く国際社会の課題の探求と解決に、主体的に取り組む姿勢を持つ人」を求めている。こうした求める学生像（アドミッション・ポリシー）に基づいて、知識集約型社会という社会構造変化によって生じる文化変容（一種の異文化）に対する理解力や対応力の習得に対する意欲や、知識集約型社会という社会構造変化とともに生じる地域社会・国際社会の課題の探求と解決に、主体的に取り組む姿勢を見るために、受験生の考えを問うた。

提示した資料は、労働集約型社会・資本集約型社会から知識集約型社会への社会構造変化によって、社会のあり方がどのように変化するかを説明している。具体的には、農業・工業（服・書籍）・労務管理を例にして、大量生産から少量生産へ、画一化から多様化へ、モノ中心から人・知識・情報中心へ変化する様子を説明している。こうした社会構造変化は、AI・IoT・ビッグデータというデジタル革命が、物理空間とサイバー空間の融合を可能にすることで生じることも説明している。

課題1では、上記のような労働集約型社会・資本集約型社会から知識集約型社会への社会構造変化をテキストから正確に読み取った上で、受験生自身の直面する知識集約型社会の在り方を整理するよう求めた。課題2では、課題1の整理を踏まえて、受験生がとらえた知識集約型社会という社会構造変化に対してどのように対応しようとしているのか、知識集約型社会という社会構造変化とともに生じる地域社会・国際社会の課題にどのように主体的に取り組もうとしているのか、その意欲や姿勢を問うたものである。

課題1の評価ポイント

課題1では、大量生産から少量生産へ、画一化から多様化へ、モノ中心から人・知識・情報中心へという社会構造変化のポイントを捉えて説明できるかどうか評価した。受験生の多くは、AIの活用、コロナ禍以降における教育現場でのICTの活用、そして労働者不足に対応する自動化・省力化技術などを例に課題に適切に答えていた。

課題2の評価ポイント

課題2では、課題1を踏まえているかどうか、自身の経験や考えを示しながら説明できているかどうか、そして受験生が社会構造変化に対して具体的にどのように向き合っていくのか、これらについて適切に記述できているかどうかを評価した。受験生の答えは、こうしたポイントを踏まえたものと踏まえていないものに二分化されたものと判断される。課題1の整理と乖離した答案、結論を支える自身の経験や考えを説得的に示していなかった答案、そして受験生が社会構造変化に対して具体的にどのように向き合っていくのか説明できていなかった答案については、評価につながらなかった。受験生は問題文を正確に読み取り、自らの経験や考えなど説得的な根拠に基づいて、的確な論理展開で主張する力を身に付けてほしい。